

「ふしぎな落ち枝」

♪ これは、私が林を歩いていたときに、「北風」から聞いたおはなしです。

秋の終わり、クヌギ林を通り過ぎた北風はこんなささやきを耳にしました。「だいぶ寒くなってきたわ。そろそろ、私たち葉っぱはお別れね」すると、今年生まれたばかりの小枝が「ぼくもお別れだよ。なにしろ同期が多すぎるからね」「いやいや、わしのまわりも兄弟が大きくなりすぎて、窮屈になってきたから、失礼することにしたよ」と大きな枝。北風が通り過ぎるたびに、そんなささやきが林では繰り返されていました。

♪ 「これってどういう意味だろう？」ってふしぎでたまらなかつた、「北風」は繰り返し私に話したんですよ。それから、こう続けました。



積もった落ち葉の中からいろいろな大きさの落ち枝をひろいあげ、ふしぎそうにじっと見つめていました。それから、頭上のクヌギの樹を見上げ、手前の枝をひきよせたかと思うと、一本の落ち枝をそこにくっつけた

あれからひと月ほどたった林で、北風がひと休みしていると、のんびりとひとりの女の人がやってきました。その人は、

ではありませんか。「あら、きっとここから落ちた枝だわ!」と、その人はにっこり。「だって、落ち枝は根元がみんな凸っているし、樹についている枝のほうは凹んでいるんですもの。うまく合うはずだわ。その大きさをみれば、どこから落ちてきた枝か、あてられるかも! 今度、子どもたちと遊んでみよう」と

それを聞いた北風はうれしくなりました。「そうか! ぼくが聞いたあのささやきは、こうして落ちている葉っぱや枝が、まだ木についているときの声だったんだ!」



北風は、ありがたい気持ちを込めて、おもいきり吹きまわりましたとき。

♪ 「北風」さんたら、その人がぶるっぶるっとふるえて、足早に去って行ったことに気がつかなかったのね、きっと。

聞き人&写真・高柳芳恵